



漢方トゥデイ

2023年1月5日放送

ストレスと漢方⑤

心身症としてのアトピー性皮膚炎を中心に

三重大学医学部附属病院 漢方医学センター **高村 光幸**

みなさんこんばんは。Buenas noches!

今回は、心身症としてのアトピー性皮膚炎についてお話します。

私個人としては、漢方治療で対応する疾患のなかでも、アトピー性皮膚炎はかなり難しい部類に入っていると思っています。とくに、総合的な漢方診断能力が必要だと感じる疾患のひとつだからです。

漢方処方が世に出された古い時代に、そのような疾患概念が全くなかったというのは当然のこととして、最新現代医学的に考えても、非常に複雑なメカニズムが背景にあることが、ときに治療の難しい理由として挙げられるかと思います。

アトピー素因という体質的な問題に、バリア機能の脆弱性等に起因する皮膚を含む臓器の過敏を背景に、様々な病因が複合的に関わる事が、2021年疾患ガイドラインでも示されています。同じく、アトピー性皮膚炎の定義では、アレルギーの存在は必須ではないということも明記されています。

この複雑な現代病ともいえるアトピー性皮膚炎の患者さんのなかには、すでに西洋医学的な標準治療を行ってもよくなる場合や、ステロイドなどの薬剤を好まないために漢方を選択する方なども含まれています。

西洋医学的な治療を全く行わずに、漢方治療だけで軽快するアトピー性皮膚炎の患者さんは、決して皆無ではありませんが、マスコミの影響やインターネットに氾濫する誤情報によって、医学的な根拠を持たずにステロイド外用薬などの治療を過剰に忌避する場合には、やはり繰り返しその誤解を解くことが、医療者として重要なことだと考えています。

少なくとも、アトピービジネスの片棒を担ぐようなこととは、きっちりと一線を画した、正しい伝統医学的理論に基づく漢方医学の提供をするべく、真摯に患者さんと向き合う姿勢が必要です。

さて、漢方医学を駆使するためには、季節的な変化や環境の変化による病状の推移を見極める必要があります。

伝統的な四季や五行の考え方によると、春は木^{もく}、すなわち五臓では肝で、情緒やストレスと関係の強い季節となります。また、春は六気の風寒暑湿燥熱のうち、風が強くなる時期なので、風邪によって悪化する皮膚病には不利な季節となります。

一方、湿度の高い梅雨時期は湿で五臓の脾、暑い夏は熱で五臓の心、乾燥する秋は燥で肺、冬は寒で腎、とそれぞれ関係性があります。

つまり、季節によって治療を変える必要があるということになりますね。

ストレス負荷によって肝の気の鬱滞が起こる、肝気鬱結もしくは肝鬱という状態は、すでに何度も登場しましたが、本来伸びやかに流れるべき気が鬱滞することで、様々な身体の部位に問題が起こりえます。

春は新学期、新生活の季節でもあり、そもそも情緒不安定になりがちです。元来精神的な脆弱性をもつ人にとって、新しい環境に置かれることは相応のストレス負荷となりえます。

そのような場合、やはり疏肝の作用をもつ柴胡を中心とした処方が必要です。これまでも登場した、四逆散、柴胡加竜骨牡蛎湯、柴胡桂枝湯や、抑肝散、加味逍遙散などを、他の随伴する病態を考えて選択します。

緊張しがちで、手足に汗をかく場合は四逆散、神経質で動悸を伴ったり、驚きやすく気分の変わりやすい性格なら柴胡加竜骨牡蛎湯、思春期の年代や月経関連の症状変化がある場合なら柴胡桂枝湯の症例があり、とくに血虚を伴う成人なら加味逍遙散、学童幼児なら抑肝散の傾向があります。

旺盛な風邪は皮膚に鬱滞し、搔痒感をもたらすとされます。これに対抗する代表処方、消風散です。十味敗毒湯も、風に対する処方なので、選択肢にあがります。今やダイエットの処方として有名な防風通聖散も、本来は風邪による皮膚病に使われる処方です。便秘があり、化膿した皮膚病変が多い場合に用いる機会があります。

また、血虚が背景にある場合、身体のなかでも内風という風邪に似たものが発生します。このような場合は、補血の処方を兼ねる必要があります。四物湯が基本になります。

し、先に述べた加味逍遙散を用いる場合もあります。

アトピー性皮膚炎の場合、発汗量は一般に減少しているとされます。表現としては、悪い汗が出て行かずに、皮膚に滞留しやすいということになります。そのため、毛穴からしっかり汗を出してやる一方で、その汗がたまりやすい関節や頸周りなどに炎症を起こさぬよう、適切な汗の処理も必要という対策が重要です。

発汗をつかさどる毛穴や汗孔の役割を、漢方では腠理という構造で捉えています。腠理の働きを正常にするのに、黄耆という生薬が重要だとされています。そこで、発汗の問題がある場合は、いろいろな処方に黄耆末を加えることがよくあります。たとえば桂枝加黄耆湯という処方、桂枝湯に黄耆末を加えたものですが、寝汗や皮膚病によく用いられてきました。

これら体表の機能は、五臓の肺からくる衛気という、バリア機能のようなものを指す力が関係しているので、肺の機能が落ちることは、皮膚の病態悪化につながります。黄耆を配した補中益気湯や防己黄耆湯は、肺の機能を高めてくれることで、皮膚の状態を改善するのです。

紅斑や紅皮症のような赤く熱をもつ皮膚病変は、夏の熱と共通の考えがあります。夏に悪化して赤くなる皮膚には、熱があるかも知れません。白虎加人参湯や黄連解毒湯といった、清熱の力を持った処方の出番が多くなります。

ただ、アトピー性皮膚炎の紅皮症の場合、単なる熱、実熱ではなくて、血虚や陰虚によって起こる虚熱の場合が多くみられます。黄連解毒湯に補血の四物湯を合わせた温清飲などによって対処する必要性が隠れていたりするのです。

秋の時期は乾燥が目立つので、とくに補血や補陰の処方が必要な症例があります。麦門冬湯、滋陰降火湯といった、主に咳嗽に使うような処方を併用することがあります。これらには補陰の力があるのです。

冬場の冷えて悪化するアトピー性皮膚炎なら、冷えの考察が非常に重要です。末梢なのか、下半身か、背景にある病態をしっかりと考えなくてはなりません。冬は腎の季節であり、補腎剤の八味丸などを必要とする症例も少なくありません。

さて、年齢によっても、アトピー性皮膚炎の病像はかなり異なっています。

乳児期は「食物アレルギーに感作されている乳児アトピー性皮膚炎」が多くを占めるとされますが、これは脾気虚があると考えられます。

したがって補脾気を目的とした治療が欠かせない時期となります。補中益気湯や黄耆建中湯が代表になります。

よだれが多く、口周囲に流涎による湿疹が目立つ場合も、脾胃の問題が考えられます。人参湯を用いることがあります。

脾気虚があると、湿もたまりやすくなります。ただでさえ水分量の多い乳幼児は、湿の

病態が絡んで、じゅくじゅくした湿潤と紅斑の病態が目立ちます。湿を取り除くための五苓散、平胃散と五苓散を合わせた胃苓湯、または六君子湯などが候補になります。

頭部や顔面部に湿潤性の湿疹が目立つなら、治頭瘡一方や消風散の出番となります。

年長児以降は吸入アレルギーの関与が大きくなるとされ、ダニはもちろんのこと、イヌ・ネコといった動物由来のアレルゲンや、スギ花粉によって症状が悪化します。これらは漢方での風邪とも考えられ、また肺気虚が背景にあることで、より風邪に冒されやすくなると考えられます。やはり補中益気湯や黄耆建中湯の必要な症例があります。

小児に睡眠は重要です。痒くて眠れない、夜泣きをする、といった場合、甘麦大棗湯や抑肝散を併用することがあります。あるいは、複雑な処方構成である柴胡清肝湯も、いわゆるカンが強く寝ない、リンパ節が腫れやすい、皮膚が浅黒い小児に用いる処方です。

成人の場合は、長年の生活習慣などによって著しい皮膚炎を起こしている症例も少なくありません。先に挙げたように、基本的にはストレスで肝が昂ぶり、気力もとの肺や脾が弱っているという原則があるでしょう。そして、熱や冷えの詳細な検討が必要です。

これまで述べた視点のほかに、化膿性の瘡瘡のような病変が散見されるなら排膿散及湯や荊芥連翹湯などの清熱の力をもつものを選んだり、瘀血と考えると便秘の有無で桂枝茯苓丸加薏苡仁や桃核承気湯、通導散を併用したりする場合があります。

また、乾燥が中心の場合は当帰飲子、冷えがあるなら麻黄附子細辛湯、手足のほてりや口渴がある場合の三物黄芩湯など、小児では使う頻度の少ない処方を選択することもあります。

いずれにしても、アトピー性皮膚炎の漢方治療は単純ではありません。気血や五臓、六気などの知識を総動員して、年齢や時節に合わせて臨機応変に処方を選ぶ、漢方の醍醐味ともいべき治療対象であることは間違いありません。そして、西洋医学の標準治療にはない、肝への働きかけを十分に行えるのが、心身一如を基本原則とする、漢方の大きな利点だと考えます。